

広瀬川に対する意識構造の分析：親子関係への着目

○宮城県仙台二華高等学校 尾形優太郎

○宮城県仙台二華高等学校 高橋亮悦

東北大学 正会員 福本潤也

広瀬川流域に住む仙台二華中学校・高等学校の生徒とその保護者を対象にしたアンケートの結果をもとに、広瀬川に対する意識構造と親子間関係の影響を明らかにする。構造方程式モデルを利用して、広瀬川の利用頻度と愛着・関心等の意識構造、流域で行われる諸活動への参加意欲の関係を分析する。特に、保護者と生徒の世代間での意識の相関や差異を分析する

1. はじめに

河川が抱える問題の一つにゴミ問題がある。ゴミ問題への対策は大きく二つに分けられ、一つはゴミを増やさない対策、もう一つはゴミを撤去する対策である。後者の対策の一つに河川管理者である国や県による活動があるが、ゴミ問題を解決するには非効率的である。そこで注目されているのがアドプトプログラム等の市民ボランティアによる清掃活動である。しかし、参加者の意欲に依存する活動でありながら、参加する市民の人数は少なく、次世代に活動を引き継いでいくためには若年層の参加意欲の向上が必須である。本研究では仙台二華中学校・高等学校の生徒と保護者に実施した広瀬川の利用頻度などに関するアンケートと構造方程式モデルを使用して清掃ボランティア活動への若年層の参加意欲を規定する要因を明らかにする。

2. 分析方法

以上の研究目的を達成するため
本研究では以下の分析を行う。

[1] 下の三つの要因が活動への参加意欲を規定する重要な要因となると仮定し、どの要因がその程度参加意欲へ影響するかを調査する。

1. 本人の関心愛着
2. 親の意識
3. 幼児期の体験

[2] 共分散構造分析を用いて以上の仮説の妥当性を検証する。

尚データとしては「3. 使用データ」に記載したア

ンケート結果を利用する。

3. 使用データ

調査対象： 広瀬川流域在住の宮城県仙台二華中学校・高等学校の生徒、保護者

調査期間： 2015年12月

サンプル数： 保護者：259 生徒：259

調査項目概要：

保護者アンケート： 自宅・職場から広瀬川への所要時間・訪問頻度、広瀬川へのイメージ・関心、知識問題、ボランティア活動の認知度・意識、子供の幼少期の川との関わり、仙台在住年数、性別、年齢、年収等

生徒アンケート： 自宅から広瀬川への所要時間・訪問頻度、広瀬川へのイメージ・関心、知識問題、ボランティア活動の認知度・意識、仙台在住年数、性別、学年等

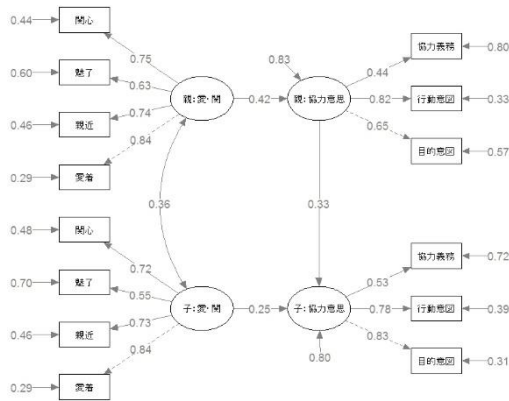
4. 分析結果

共分散構造分析を用いてアンケートを分析した結果明らかとなった関係を図1に示す。保護者アンケートに関しての項目を「親」、生徒アンケートに関しての項目を「子」と表記している。図1からは[1]親の川に対する愛着・関心は親の河川清掃活動への協力意思に対して優位に作用する

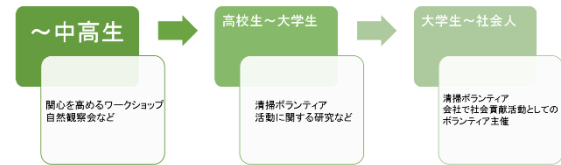
[2]子の川に対する愛着・関心は子の河川清掃活動への協力意思に対してあまり作用しない

[3] 親の川に対する愛着・関心は子の川に対する愛着・関心に対して優位に作用する

[4]親の河川清掃活動への協力意思は子の河川清



—図 1—



—図 2—

掃活動への協力意思に優位に作用する

5.考察

[1]と[2]から、親の愛着・関心の向上は活動への協力意思を高めることに効果があるが、子に関しては愛着・関心の向上が必ずしも活動への協力意思を高めることに効果があるわけではないことが読み取れる。

また、[3]から親の愛着・関心が子の愛着・関心に与える影響が大きいこと、[4]から、親の活動への協力意思がこの活動への協力意思に与える影響が大きいことがそれぞれ読み取れた。

このことから子の愛着・関心は親の愛着・関心に影響され、子の活動への協力意思は自らの愛着・関心よりも親の活動への協力意思に影響を受けやすい、

つまり子供の個人の傾向よりも親の傾向が愛着・関心や協力意思に結びつきやすいことが分かった。この結果から、継続的な河川清掃ボランティア活動を推進していくためには、将来的に親となる子供の世代の愛着や協力意思の向上を促すため、図2に示したような世代に限定されない継続的な教育・広報活動が必要である。子供の間で愛着や関心を高め、高校生から大学生にかけて学校での教育活動やボランティア実習、特別授業などで諸活動に関する研究等を行ない、大学生から社会人にかけては、大学や会社の社会貢献活動の一環としての清掃ボランティアを企画し、参加を促すことで愛着や関心を高め、その後の協力意思を高めていくなどである。

河川環境の向上には長期継続的な清掃活動が不可欠であり、これによって持続的に河川環境の改善が期待できるだろう。